

2022. 1. 9 (日) マタイ2:19~23

2:19 ヘロデが死ぬと、見よ、主の使いが夢で、エジプトにいるヨセフに現れて言った。

2:20 「立って幼子とその母を連れてイスラエルの地に行きなさい。幼子のいのちを狙っていた者たちは死にました。」

2:21 そこで、ヨセフは立って幼子とその母を連れてイスラエルの地に入った。

2:22 しかし、アルケラオが父ヘロデに代わってユダヤを治めていると聞いたので、そこに行くのを恐れた。さらに、夢で警告を受けたので、ガリラヤ地方に退いた。

2:23 そして、ナザレという町に行って住んだ。これは預言者たちを通して「彼はナザレ人と呼ばれる」と語られたことが成就するためであった。

<説教>

私たちの主イエスは天の父なる神のみこころに従われ、〈ご自分を空しくして、…人間と同じようになられ…人としての姿をもって〉(ピリピ 2:7)、ヨセフとマリア夫婦の子としてこの世に生まれてくださいました。

その神の御子イエスは生涯〈自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで〉御父のみこころに〈従われました〉(同 2:8)

御子イエスは十字架の死に至るそのときまでは決して死ぬわけにはいきませんでした。

それで、幼子イエスを捜し出して殺そうとしているヘロデ王の手からイエスを守り、生かすために、父なる神が歩一歩行動なされたのです。

まずその〈ヘロデが死〉にました。(19)

病気で苦しみながら死んだと言われていますが、すべての人間の命が神の御手の中にあることを思えば、これも神のみわざでした。

そして神は再び御使いによってヨセフになすべきことを指示なさいました。(19-20)

ヨセフはこのときも神の命令にすぐに従いました。(21)

しかし、ヘロデも含めて〈幼子のいのちを狙っていた者たち〉が死んだのだからもう安心だと思って〈イスラエルの地に入っ〉てみると、早速次の問題が起きました。(22a)

なお、このヨセフが抱いた〈恐れ〉は、「人を恐れるな。神だけを恐れよ。」としばしば命じられているような、人に対する恐れ、つまり人の顔色やご機嫌をうかがう、神への不信仰や臆病から来る恐れではなかったでしょう。

〈アケラオ〉は父ヘロデに勝るとも劣らない残忍な人でした。

やっとなあ残忍なヘロデがいなくなったと思ったら、代わった人物もまた同じく残忍だったとは、言うなれば一難去ってまた一難だったわけです。

ヨセフが抱いた恐れは、そんな残酷で無慈悲な支配者のもとで生活するがゆえの再びの命の危険、生活の困難—自分だけでなく、幼子イエスやその母マリアも被るもの—を予想した、いわば人間として、また親として、夫として当然の恐れだったと思います。

でもまた次なる神の確かな守りと導きが用意されていました。

神はまた夢の中でお告げになり、ヨセフたちは〈ガリラヤ地方に退〉きました。(22b)

このように神は少しずつ、徐々に、一歩ずつ、その民を導いて行かれるのです。

こうしてヨセフと幼子イエスとその母マリアたちは〈ガリラヤ地方〉の〈ナザレという

町に行って住んだ) のでした。(23a)

このときイエスは幼子でしたから、人(の子)としてはヨセフたちのような〈恐れ〉を自覚していなかったかもしれません。

しかし〈恐れた〉ヨセフ(と母マリア)と共にいて、彼ら両親と共に移動することで、イエスも人としての〈恐れ〉を共有されたのであり、またそんな私たち人間の恐れを、その幼い時からその身に負ってくださったのです。

ですから、そういうイエスの目は、そんな自分では選びようがなく過酷で命の危険や様々な恐怖に脅かされる悲惨な境遇のもとに生まれ育っている幼子たちのうえに、昔も今も特別な同情と慈しみをもって注がれているに違いありません。

さて最後にマタイは、幼子イエスが両親に連れられて〈ナザレという町に行き住んだ〉のは〈これは預言者たちを通して「彼はナザレ人と呼ばれる」と語られたことが成就するためであった。〉と言います。(23b)

〈ナザレ人〉とは当時ユダヤ人の中では軽蔑、悪意のこもった呼び名でした。

まず「キリストはガリラヤから出るだろうか。」(ヨハネ 7:41)、「よく調べなさい。ガリラヤから預言者は起こらないことが分かるだろう。」(同 52)と言われ、そう言われていたガリラヤの人々の間でさえも「ナザレから何か良いものが出るだろうか。」(同 1:46)と言われていたほどでした。

〈ご自分の民をその罪からお救いになる〉(マタイ 1:21)お方、〈その名はインマヌエル(神が私たちとともにおられる)と呼ばれる〉(同 23)、お方、〈大いなる者…いと高き方の子…神である主は、彼にその父ダビデの王位をお与えにな)り 〈…その支配に終わりはありません)〉というお方(ルカ 1:32-33)、神の御子であり、神であるお方イエスが、〈ナザレ人〉と呼ばれて蔑まれたのです。

〈この方はご自分のところに來られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。〉(ヨハネ 1:11)のです。

これがイエスがこの世でお受けになった人からの扱いでした。

なお、〈これは預言者たちを通して…〉とマタイは記していますが、〈「彼はナザレ人と呼ばれる」〉という言葉そのものは旧約聖書のどこにもありません(ナザレ—ヘブル語では「ノツラト」—という地名さえありません。それほど無名の小さな町だったということでしょうか)。

イザヤ 11:1 には〈エッサイ(ダビデ王の父)の根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。〉とあり、この〈若枝〉(ヘブル語：ネツェル)がナザレ人(ヘブル語：ノツリ)と同じ文字、似た発音となります。

また、士師記 13～16 章ではサムソンのことが「ナジル人(ナジール：聖別された人)」と言われ、創世記 49:26 ではヨセフのことが「ナジール(訳：選り抜かれた者)」と記されていて、ギリシャ語のナザレ人と似た発音となります(ただしサムソンもヨセフも「ナザレ人」とは呼ばれていません)。

ギリシャ語訳ではナジル人(ナジライオス)、ナザレ人(ナヅライオス)となり、同じ原語どうして似た文字と発音となります。

これらのことから、イエスが〈預言者たち〉によって言われていた、「ダビデの子」なる王、「ユダヤ人の王」であり、またユダヤ人たちを救うために神によって特別に聖別さ

れ選ばれた救い主なのだということをマタイは示しています。

と同時に、繰り返しになりますが、そんな尊い、本来は人々から喜んで受け入れられるべき救い主、神の子、栄光の主なるお方を人々は軽蔑し、拒絶し、受け入れず、殺そうとまでした（やがて十字架につけて殺した）のだ、とマタイは（人の罪を）示すのです。

私たちはそのようなイエスをどう見て、どうするのでしょうか。

もちろん、イエスを軽蔑し、拒絶し、受け入れず、殺した側の人間であることを認めて、このイエスにある罪の赦しを求め、イエスに信頼して神に立ち帰らなければなりません。

そして、そのイエスを信じイエスに従って歩むときに、〈ナザレ人と呼ばれる〉イエスがお受けになったような世の人々からの蔑み、悪意ある扱いを〈神のことばとイエスの証しのゆえに〉（黙示録 1:9）甘んじて受けることも覚悟しなければならないのです。